

体育の存在意義論の批判的検討 —課題の整理と今後の議論に向けた考察—

高橋 徹

Toru Takahashi: Critical review of the theory of existential significance of physical education
—The organize problem point and examine future task— : Bulletin of Sendai University, 49 (1) : 37-44,
September, 2017.

Abstract: The purpose of this study is to conduct a critical review of the theory of the educational significance of physical education and organize its problem points. This study examines and discusses the educational significance of learning about body movements when considering the educational significance of physical education in schools.

The following procedure is followed to examine this aspect of physical education. First, this study clarifies the problems that emerge when conducting a discussion on the educational significance of physical education in schools; further, it also examines the need to focus on body movements. Second, it details the discussion in considering the grounds on which learning about body movements has educational significance. Finally, it highlights the educational significance of physical education in schools.

A basic question that arises regarding research on the philosophy of physical education and the field of sports is, “What is physical education?” Consequently, this study was also faced with this question, the answers to which are as follows: Physical education aims to educate students regarding the body; therefore, it is necessary to focus on body movements. However, this does not mean that they should learn every body movement in their physical education class. Rather, physical education must clarify the body’s ideal image as an educational object. In the future, in promoting the study of the theory of the educational significance of physical education, a focused discussion on clarifying the body’s ideal image and an explanation as to why the body needs to be fostered at the school physical education class are required.

Key words: body movement, educational significance, physical education class, philosophy of sport and physical education

キーワード: 身体運動, 教育的意義, 体育の授業, 体育・スポーツ哲学

I. はじめに

体育・スポーツ哲学分野の根本的な研究課題には「体育とは何か?」という問いがあるとされる²⁵⁾。その理由は、この問いに対する答えを明らかにすることによって、体育についての思

惟や認識の確実な出発点が明確になることにある^{1) 24)}。つまり、体育をどのように考え、どのように進めるのかという問題を根本的に究明することが任務であるとされる当該領域においては、この問いに向き合うことが重要な課題とされているのである⁷⁾。

さて、この「体育」という言葉は所謂、学校で学ぶ教科としての体育を意味しているのか、あるいは学校という場に限定されることのない広義の体育として捉えるべきなのか、この言葉の解釈次第ではそこから展開される議論の方向性が如何様にも変化を遂げ得るであろう。しかしながら、実際のところは「体育とは何か?」という問いへの解答を考えるにあたり、「伝統的な体育原理論においては、学校や体育の制度が暗黙のうちに前提とされてきた」⁹⁾と指摘されている。そして、教科としての体育を前提としつつ「体育とは何か?」について検討する議論は、各教科に比して体育の存在意義を主張する議論、あるいは体育の多様な可能性を検討する議論に置き換えられて展開されることで、体育・スポーツ哲学の研究領域を越えて体育学の全ての領域に亘って検討されてきた課題でもある。

本稿の目的は、体育・スポーツ哲学分野が抱える上記の背景を踏襲しつつ、教科としての体育を前提とした従来の存在意義論を批判的な視座から概観し、それらの議論が抱える課題を整理することにある^{注1) 注2)}。

II. 従来の体育の存在意義論が抱える課題

はじめに、教科としての体育の存在意義を主張する代表的な議論を把握するとともに、その内容を批判的に検討する。なお、本稿では体育の存在意義論の全体像を捉える上で、過去に雑誌「体育科教育」の誌上において連載が組まれた「体育はなぜ必要か—体育の存在意義を考える—」をテーマにした一連の議論^{13) 20) 21) 27) 34)}を参照することとした。この議論は各執筆者の個別の主張を超えて、存在意義論の全体像を包括的に把握する上で有益な資料であるとともに、執筆者にも体育学の各研究領域を代表する研究者を採用していることから、そこでの議論には一定の学術的意義が認められると判断した。

さて、上記の一連の議論を概観すると、体育の存在意義を主張する上で、三つの主要な論点を抽出することができる^{注3)}。その第一は、身

体運動の効用に関する議論である。これはすなわち、体育には日常生活における運動経験の貧困化が引き起こす体力や運動能力の低下を補完することで、社会生活への積極的な参加促進や仕事の能率向上に繋げる役割があるという議論である²⁰⁾。この議論は身体運動がもたらす社会的な効用を提示するという点で、簡潔明瞭かつ重要な主張であると評価できるが、一方で、この主張のみで体育の存在意義を説明し尽くせるとは言い難い。なぜならこの考え方はあくまでも身体運動を手段として捉えたものであり、そこにおいて身体運動は、体育にとっての一つの媒体として価値づけられているに過ぎないからである。すなわち、この議論では人間が身体運動を通して得られる各種の効用は説明できるものの、子どもに身体運動を学習させ、習得させることそれ自体の教育的意義は提示し得ないのである。身体運動の効用のみを追求するのであれば、体力向上などを目指す上でより効果的とされる運動のみを選出し、それだけを集中的に実践することが最も効率的な方法とされてしまうだろう。また、生活の自動化が今後より一層進むと仮定した場合、その世界の中で生活していく上で必要とされる体力や運動能力さえ身につけていれば十分であるという反論を受けることも考えられるのである。

第二の論点は文化論的視点、すなわちスポーツを一つの文化として捉えるという議論である。これは、体育においてスポーツを重要な生活文化として捉えることで、スポーツを教材とした教育活動が展開できるという主張である²⁷⁾。この主張はスポーツを一つの文化として次世代に継承していくという意味において、体育の果たすべき役割の大きさを示しているとも言える。しかし、体育を教育目的との関係から捉えた場合、原理的にはスポーツなどやらなくて構わないという指摘も見られる⁴⁾。また、体育で扱うことで継承し発展させるべき文化には、スポーツだけでなく、スポーツや表現運動も含んだ身体運動文化と言うべき所作やふるまいも含めるべきであるという主張も存在する¹⁸⁾。これらの主張は、スポーツ文化を体育の教材として取り上げることに一定の意義を認めつつも、他方

では単なるスポーツ指導を超えた体育の可能性を探求することの必要性を示しているという点で、看過することのできない提言として受け止めるべきであろう。

第三の論点は人間形成に主眼を置く議論である。これはすなわち、体育とは子どもの人格発達に働きかけ向上させることができる教科であり、そこには人間形成の可能性が内包されているという議論である³⁴⁾。体育が人間形成に役立つという認識は、教科としての体育が成立して以降継続的に受け継がれてきた考え方であり、そのような体育に対する認識を否定することはできない。しかし、人間形成論の主張の多くが「こころ」の形成を中心とし、身体的側面よりも心理的（精神的）側面の形成に重点を置いてしまっているという批判も見受けられる¹⁶⁾。この点に関し、久保¹⁶⁾は示唆に富む重要な指摘を述べている。

体育は「身体」へ還らなければならない。体育は「身体教育」であり、「精神教育」や「スポーツ教育」なのではない。…中略…「体育において最も重要なものはこどもたちの『身体』である」¹⁶⁾。

すなわちこの指摘からは、体育にとって最も重要な側面である身体を教育するという観点を改めて顧みることの必要性を窺うことができる。また、この指摘は体育の在り方を検討する上での一つの方向性を明示していると捉えることもできるのである。

以上、体育学分野で議論される体育の存在意義論を概観すると、それぞれの主張が一定の意義や説得力を有するものの、それぞれの議論に限界や反論が生じる余地があることが分かる^{注4)}。すなわち、体育の役割はスポーツを教えることや人間形成への寄与のみで説明し尽くされるのではなく、もちろん体力低下をはじめとする社会の発展の背後で生じる負の側面の補完機能という説明も十分なものとは言えないのである。したがって、改めて「体育とは何か？」という疑問に対峙するためには、久保¹⁶⁾の指摘に集約されるように、体育とは身体教育であ

るという基本認識に立ち返ることから始めてみる必要があると言える。そして付言すれば、身体教育としての体育の存在意義を検討する上では、身体を動かすことを通して身体運動を身につけることの教育的意義について検討する必要があると考えられる。なぜなら、体育が身体教育であるとするならば、身体を教育するためには身体を動かすことが不可欠だと考えられるからである。つまり、身体を動かすことを伴わない体育、例えば椅子に座り机に向かったままの固定された姿勢によって身体を育むといった体育は想定することができないのである。

なお、このように体育を身体教育として認識すべきであるという主張、および身体を動かすことを通した身体運動の習得に教育的意義を見出すべきであるという主張は新たな課題の提起ではなく、体育・スポーツ哲学やスポーツ運動学の研究領域において、これまでも都度議論されてきた題目でもある。次節では、それらの先行研究における議論を概観することで、身体運動の習得それ自体が教育的意義を有すると考えられていることの原因を考察することとする。

Ⅲ. 身体運動習得の教育的意義に関わる過去の研究

体育・スポーツ哲学の領域において関連する代表的な研究としては、滝沢による一連の研究^{28) 29) 30) 31) 32)}を挙げることができる。それらの研究を概略すれば、体育における「[からだ]」²⁹⁾の教育を主眼に置き、特に「賢い [からだ]」²⁹⁾の獲得を目指した運動実践の必要性について論じつつ、運動実践や運動指導の構造の解明なども射程に入れた体系的な身体、および身体運動研究であると言える。そして近年の研究においても、身体を教育を視野に入れた運動の指導をどのように展開するべきかという問題意識を持ちつつ、運動の習得が身体の可能性の拡大に繋がることを指摘している³²⁾。なお、滝沢²⁹⁾は「[からだ]」という表記を用いる理由について、一般的には人間を心（こころ）と体（からだ）の二側面から捉えることが多いとした上で、体（か

らだ) についての新たな見方を示すために「からだ」を用いているのだと述べている。そして「からだ」には「肉体的な側面だけでなく、身体的な側面がある」³⁰⁾ ののだとした上で、賢い「からだ」とは「意図を実践できる「からだ」であり、具体的な課題を解決できる「からだ」である」³⁰⁾ としている。またそれは「身体的な知を蓄えた「からだ」であり、融通の利く「からだ」でもある」²⁹⁾ とされ、身体運動を通した「多くの体験が「からだ」を賢くする」²⁹⁾ のだと述べている。なお、この「からだ」という身体の捉え方は、身体運動習得の教育的意義を考察する上でも示唆的な概念として捉えることもできる。

さて、これ以外にも当該領域では多くの議論が展開されてきた。例えば、杉山²²⁾ は身体教育の目的を身体の育成であるとした上で、その育成過程は同時に「動き」の習得過程でもあると述べている。そこには、「『身体の育成』は『動きの習得』によって初めて可能になる」²²⁾ という前提があり、そのために体育内容として様々な運動教材が考えられ、実践されてきたとしている。

また、木村¹⁴⁾ も身体運動に関する考察として、「新しい動きを習得したり、他者や事物との関係の中で動きを変化させたりすることは、単にモノとしての身体の性能を改善するというだけでなく、身体において世界と自己との関わり方の組み換えを行うことなのである」¹⁴⁾ と指摘している。そしてその上で、「身体において千変万化する世界と共感的に関わる力を養うことは、これからの体育の大きな目標になるのではないだろうか」¹⁴⁾ と述べることで、体育の目指すべき姿にも言及している。

一方で、釜崎^{8) 10)} は体育を身体教育として捉えた上で、そこに既存の科学知では捉えることのできない身体知の次元が存在することに言及している。また、樋口⁵⁾ も体育における身体知の次元に着目し、その次元こそが体育にとっての価値となり得るものであり、既存の体育を積極的に変質させる可能性を持つことを指摘している。これらの指摘もまた、体育とは身体教育であるという認識を顧みる上で多くの示唆を

与えるものである。なお、このように身体や身体運動に焦点化した議論は個々の研究に限られたものだけではなく、日本体育学会体育哲学専門領域や日本体育・スポーツ哲学会におけるシンポジウムでの議論の一環としても継続的に取り上げられている^{注5)}。

他方、スポーツ運動学の領域における研究の積み重ねも看過することはできない。例えば、三木¹⁷⁾ は学校体育の中に技能習得の学習を軽視する傾向が見られるようになってきていることを指摘した上で、体育の中心的な学習に「動きかたの学習」¹⁷⁾ を位置付け、運動ができるようになることが「『動ける身体』の獲得」¹⁷⁾ に繋がるという観点から体育授業の重要性を論じている。そこにおける「動ける身体」の獲得とは、「ただたんなる生理学的な運動感覚だけでなく、さらに広げられた動きの世界を可能にする身体」¹⁷⁾ を獲得すること、あるいは「子どもにとって現在、および将来の運動実践をより豊かにするための身体の動かし方の学習」¹⁷⁾ であると定義されている。

なお、この指摘は彼の研究領域であるスポーツ運動学領域全体に通底する共通認識として捉えることもできる。それは同じ研究分野の朝岡³⁾ もまた、運動技能の獲得それ自体の教育的価値を軽視する傾向を問題視しつつ、教科としての体育における運動学習の存在根拠を明らかにしようとしていることから明らかである。また、この分野の第一人者である金子¹²⁾ も、「新しい動きかたを身につけ、その習熟を高めていくプロセスには、人間形成のための貴重な教育契機が提供されていることは贅言を要しない」¹²⁾ と述べている。

以上、身体運動習得の教育的意義に関する先行研究での議論を概観すると、全ての議論に共通する前提を導き出すことができる。それはすなわち、身体を動かしつつ身体運動を身につけることが身体に変化をもたらし、それが人間の成長に深く関わっているため、そこには教育的に意義が認められるということを主張する点である。例えば、人間は「一生を通じて<動き>を覚え、使いこなす、発展させていく存在である」³⁶⁾、あるいは「運動実践との関係で子供が

育っていくことについて考えたいのである」²⁶⁾という指摘は、暗にその前提を表現しているとも言えよう。

さて、客観性を重視する研究の観点に立脚するならば、この前提自体、すなわち概略した表現を用いれば、人間にとって身体運動を身につけることは大切であるという前提を問い直す作業も必要になるであろう。しかし一方で、体育・スポーツを愛好する立場としては、仮に研究上の手続きであったとしても、この前提を客観的な立場から評価するという事は非常に困難な課題になり得ると考えられる。なぜなら、おそらくは体育・スポーツの研究者にとって、身体運動を身につけることは大切であるという前提は自らの過去の体育・スポーツ実践に裏付けられた事実として認識されている事柄であり、それぞれの研究はその事実を証明するための理論的裏付け作業の側面も持ち合わせていたと考えることができるからである。しかし、数多く公表される先行研究の存在や、継続的に開催されるシンポジウムで取り上げられるテーマの多様性が示しているように、人間の教育にとって身体運動がなぜ必要なのか、なぜ学校体育の教材として身体運動を取り上げる必要があるのかという疑問に対し、疑義を抱かせない形で答えを示すという研究課題は未だに解決された訳ではないのである。

IV. まとめ

本稿の目的は、教科としての体育を前提とした従来の体育の存在意義論を批判的な視座から概観し、それらの議論が抱える課題を整理することであった。

従来の体育の存在意義論における主張は一定の意義や説得力を有するものの、それぞれの議論に限界や反論が生じる余地が残されている。その中でも特に、体育を身体教育として捉えた際に検討すべき疑問点として、なぜ身体を育てるための手段として身体運動を習得することが必要なのかという疑問に対する教育的意義の観点からの回答は十分なものではない。したがって、今後の研究課題としては、身体運動習得の

教育的意義を解明しつつ、その議論を基点にする形で体育の存在意義を検討していくことが必要になると考えられる。

なお、その方向で議論を進める上では懸念すべき点もある。例えば、身体運動習得の教育的意義に関する先行研究に通底するのは、身体運動を習得することの必要性への認識であったが、それは体育において子どもにありとあらゆる身体の動かし方を教え、運動を身につけさせれば良いということの意味するものではない。なぜなら、久保¹⁶⁾の指摘に倣うならば、体育とは身体教育であり、そこではあくまでも身体を育てることが目指されなければならないからである。つまり、ただ単に闇雲に運動を身につけさせることで身体が育つとは限らないのであり、そこにはまず育てるべき身体の理想の姿が教育目標として示されなければならないのである。その点で、本稿において検討を加えた「賢い [からだ]」²⁹⁾ や、「動ける身体」¹⁷⁾ は体育で育てるべき理想の身体の一つになり得るものだと考えることもできる。しかし今のところ、それらはあくまでも各研究者の個々の主張に止まっているのが現状である。また、学校の教科としての体育において「賢い [からだ]」²⁹⁾ や「動ける身体」¹⁷⁾ を育てる必要性、すなわち学校という公教育の場でその身体像を理想化させる上での理由に対する客観的な立場からの説明も不十分である。

教科としての体育の存在意義は各時代の社会的状況とともに変化を遂げているため、そこに普遍的な解を見出すことは困難なことであるかもしれない。あるいは、体育の存在意義は常に問い続けていく課題であるのかもしれない。いずれにしろ、今後、体育の存在意義に関する研究を進める上では、体育が身体教育であるという認識を持ちつつも、人間にとって身体運動を身につけることが大切であるという前提を問い直した上で理想の身体像を明らかにし、その身体像がなぜ学校という公教育の場で育てる必要があるのかを十分に説明するという方向性での議論が必要になると考えられる。

注

- 注1) 体育の存在意義についての議論を進めるにあたり本研究が対象とする体育とは、日本の戦後の学校制度において授業科目として設置されている体育を意味している。従って、従来の存在意義論を概観する上で検討対象とする資料も、日本の学校の授業科目としての体育に言及したものが中心となっている。特に本研究では、体育・スポーツ哲学、体育科教育学、およびスポーツ運動学の各研究領域から提出された資料を対象としている。
- 注2) 本研究で使用する用語を次のように規定する。
①「身体運動」という言葉は、広く身体活動や身体動作などの意味も含むものとして使用する。すなわちそれは、人間が身体を動かすこと全般を意味した言葉である。②「教育的意義」という言葉、および「教育的意義を有する」という表現は、人間の教育に対して有意に寄与する価値を持つということを意味している。
- 注3) 本研究にて参照する雑誌「体育科教育」の連載では、身体運動論²⁰⁾、人間形成³⁴⁾、社会との関係¹³⁾、文化論²¹⁾、体育科教育学²⁷⁾という5つのテーマから議論が展開されている。しかし、それらを総括する形で評価した場合、体育の存在意義論は身体運動の効用、文化論的視点、人間形成という3つの論点に集約することができる。なぜなら、社会との関係、体育科教育学の2つのテーマについては存在意義論の全てに通底するものであり、例えば社会との関係を考慮しない議論などは成立し得ないことから、本稿ではこの2つの論点については取り上げないこととした。
- 注4) この課題は先述した雑誌「体育科教育」での連載の執筆者間でも認識されており、執筆者の一人である友添³⁵⁾は、先進諸国での新自由主義の台頭の中で体育はその存在意義が問われる段階にあるとした上で、「体育ではこんなことができる、こんなことをしてきたとまったく大きな声で発言していく必要性や説明責任がある」³⁵⁾と述べている。また、「教科である以上、もちろんその教科が対象とする文化領域があるわけですが、体育の場合、それはいったい何かということ意外とはっきりせずに来た」³⁵⁾という問題点も指摘しており、そこ

からはこの議論を更に進めていくことの必要性が窺える。

- 注5) 例えば、以下のテーマで議論が交わされてきた。「体育哲学を再考する（1年目）—『体育原理論』のこれまでとこれから—」²³⁾、「体育哲学を再考する（2年目）—『体育原理論』の応用可能性—」²⁴⁾、「体育哲学を再考する（3年目）—新たな議論の可能性の探求—」²⁵⁾、「『実践からの体育・スポーツ哲学』の再検討（1年目）—子供の身体は運動によってどう変わるのか？—」²⁶⁾、「運動の知性的意味を探る（1）—運動と知性—」³³⁾、「運動の知性的意味を探る（2）—運動の知と教育—」⁶⁾、「『体育・スポーツ教育における今日的学力について』—新学習指導要領との関連から—」¹⁵⁾、「体育哲学における学校体育論議の検討と視界（1）学校体育論の逆照射—体育は子どもたちをどうしたかったのか？—」²⁾、「体育哲学における学校体育論議の検討と視界（2）学校体育論議の起点としての哲学的源泉—体育は子どもたちをどうしたいのか？—」¹⁹⁾、「身体知研究の現在：身体教育の可能性を探る」¹¹⁾。

付記

本研究はJSPS 科研費(課題番号 17K13143, 研究代表者 高橋徹)の助成を受けたものです。

引用文献

- 1) 阿部悟郎(2013)「体育の原理論」の意義と可能性。田井ほか著, 日本体育・スポーツ哲学会第34回大会「シンポジウム」報告 体育哲学を再考する(1年目)—「体育原理論」のこれまでとこれから—。体育・スポーツ哲学研究, 35(1): 53-55.
- 2) 阿部悟郎・大橋道雄・平井章・久保健・長見真・滝沢文雄(2010)日本体育学会第60回大会専門分科会シンポジウムA報告 体育哲学における学校体育論議の検討と視界(1)学校体育論の逆照射—体育は子どもたちをどうしたかったのか?—。体育哲学研究, 40: 51-67.
- 3) 朝岡正雄(1994)教科体育における運動学習の存在根拠に関する運動学的一考察。体育学研究, 39: 267-275.
- 4) 樋口聡(2005)身体教育の思想。勁草書房。

- 5) 樋口聡 (2013)「身体知」は体育をどう変えるか? . 体育科教育, 61 (9) : 9.
- 6) 井上誠治・滝沢文雄 (1999) 運動の知性的意味を探る (2) —運動の知と教育—. 体育原理研究, 29 : 101-115.
- 7) 石津誠 (1965) 第一号まえがき. 体育原理研究会編, 体育の原理 (第1号). 不昧堂出版, pp.1-2.
- 8) 釜崎太 (2010) 身体教育を突破口に学校改革を展望する. 体育科教育, 58 (12) : 62-63.
- 9) 釜崎太 (2013a) 体育原理論の系譜—「技術的合理性」から「反省的实践」へ—. 田井ほか著, 日本体育・スポーツ哲学会第34回大会「シンポジウム」報告 体育哲学を再考する(1年目)—「体育原理論」のこれまでとこれから—. 体育・スポーツ哲学研究, 35 (1) : 55-57.
- 10) 釜崎太 (2013b) スポーツ教育から身体教育へ. 体育科教育, 61 (9) : 14-17.
- 11) 釜崎太・田中彰吾・生田久美子・樋口聡 (2013) 日本体育学会第63回大会専門分科会シンポジウムB報告 身体知研究の現在: 身体教育の可能性を探る. 体育哲学研究, 43 : 73-82.
- 12) 金子明友 (2002) わざの伝承. 明和出版.
- 13) 菊幸一 (2005) 体育はなぜ必要か 体育の存在意義を考える② 社会との関係から. 体育科教育, 53 (11) : 52-54.
- 14) 木村真知子 (1997) 体育は何を育てる教科か—体育科の原点を探る—. 体育科教育, 45 (11) : 31-33.
- 15) 小林日出至郎 (2009) 日本体育学会第59回大会専門分科会シンポジウムB報告 「体育・スポーツ教育における今日的学力について」—新学習指導要領との関連から—. 体育哲学研究, 39 : 69-83.
- 16) 久保正秋 (2011) 体育哲学の視界. 大橋ほか著, 日本体育学会第61回大会専門分科会シンポジウムA報告 体育哲学における学校体育論議の検討と視界 (2) 学校体育論議の起点としての哲学的源泉—体育は子どもたちをどうしたいのか?—. 体育哲学研究, 41 : 42-46.
- 17) 三木四郎 (2005) 新しい体育授業の運動学. 明和出版.
- 18) 森知高 (2016) 体育の貧困. 高橋ほか著, 日本体育・スポーツ哲学会第37回大会「シンポジウム」報告 「実践からの体育・スポーツ哲学」の再検討 (1年目)—子供の身体は運動によってどう変わるのか?—. 体育・スポーツ哲学研究, 38 (1) : 74-77.
- 19) 大橋道雄・阿部悟郎・佐々木究・森田啓之・関根正美・久保正秋 (2011) 日本体育学会第61回大会専門分科会シンポジウムA報告 体育哲学における学校体育論議の検討と視界 (2) 学校体育論議の起点としての哲学的源泉—体育は子どもたちをどうしたいのか?—. 体育哲学研究, 41 : 29-47.
- 20) 大築立志 (2006) 体育はなぜ必要か 体育の存在意義を考える④ 身体運動論の立場から. 体育科教育, 54 (1) : 64-66.
- 21) 寒川恒夫 (2005) 体育はなぜ必要か 体育の存在意義を考える③ 文化論の立場から. 体育科教育, 53 (12) : 66-68.
- 22) 杉山英人 (2007) 「自然科学からみた身体教育論」—体育における身体と動きの関係性—. 体育哲学研究, 38 : 109-112.
- 23) 田井健太郎・阿部悟郎・釜崎太・佐々木究 (2013) 日本体育・スポーツ哲学会第34回大会「シンポジウム」報告 体育哲学を再考する(1年目)—「体育原理論」のこれまでとこれから—. 体育・スポーツ哲学研究, 35 (1) : 51-59.
- 24) 田井健太郎・佐々木究・近藤智晴・中澤篤史・中嶋哲也 (2014) 日本体育・スポーツ哲学会第35回大会「シンポジウム」報告 体育哲学を再考する(2年目)—「体育原理論」の応用可能性—. 体育・スポーツ哲学研究, 36 (1) : 45-54.
- 25) 田井健太郎・佐々木究・杉山英人・高橋徹・高橋浩二 (2015) 日本体育・スポーツ哲学会第36回大会「シンポジウム」報告 体育哲学を再考する(3年目)—新たな議論の可能性の探求—. 体育・スポーツ哲学研究, 37 (1) : 69-78.
- 26) 高橋浩二・田中愛・加藤泰樹・原田憲一・森知高 (2016) 日本体育・スポーツ哲学会第37回大会「シンポジウム」報告 「実践からの体育・スポーツ哲学」の再検討 (1年目)—子供の身体は運動によってどう変わるのか?—. 体育・スポーツ哲学研究, 38 (1) : 67-79.
- 27) 高橋健夫 (2006) 体育はなぜ必要か 体育の存在意義を考える⑤ 体育科教育学の立場から. 体育科教育, 54 (2) : 60-62.
- 28) 滝沢文雄 (1999) 生きる力に不可欠な [からだ] の現象学的考察—関わりとしての運動実践—. 体育思想研究, 5 : 195-219.
- 29) 滝沢文雄 (2008a) [からだ] の教育. 体育・スポーツ哲学研究, 30 (1) : 1-10.
- 30) 滝沢文雄 (2008b) 身体を教育するとはどういうことか. 体育哲学研究, 38 : 121-125.

- 31) 滝沢文雄 (2009) [からだ] の教育. 遠藤ほか著, 体育の見方, 変えてみませんか 小学校の先生へのメッセージ 国立大学附属小学校長は語る, 学習研究社, pp.12-52.
- 32) 滝沢文雄 (2014) 「現象学的運動学」論考—身体を教育するための新たな運動学—. 体育・スポーツ哲学研究, 36 (1) : 13-28.
- 33) 滝沢文雄・井上誠治 (1998) 運動の知性的意味を探る (1) —運動と知性—. 体育原理研究, 28 : 143-155.
- 34) 友添秀則 (2005) 体育はなぜ必要か 体育の存在意義を考える① 人間形成の立場から. 体育科教育, 53 (10) : 62-65.
- 35) 友添秀則・菊幸一・寒川恒夫・大築立志・高橋健夫 (2006) 体育はなぜ必要か 体育の存在意義を考える 最終回. 体育科教育, 54 (3) : 58-61.
- 36) 吉田茂 (1998) スポーツ運動学成立の道すじ. マイネル: 金子明友編訳, マイネル遺稿 動きの感性学. 大修館書店, pp.107-181.

(2017年 5月31日受付)
(2017年 7月28日受理)